

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	European Society of Cardiology(ESC)Congress 2012
作成者(著者)	清水, 一寛
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(2). p.125 126.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.125
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD00466374

European Society of Cardiology (ESC) Congress 2012



清水 一寛

東邦大学医学部内科学講座循環器内科学分野 (佐倉)

2012年8月25～29日に、ドイツのミュンヘンで欧州心臓病学会 (European Society of Cardiology : ESC) 学術集會が開催された。参加者は、2万7千人を超える大規模なもので、今回は世界中から10000超の応募演題が寄せられ、その中から4000演題が採択された。ESCと米国心臓協会 (American Heart Association : AHA) 学術集會はわれわれ循環器内科医にとって、目標の学会である。ヨーロッパの街並みは綺麗なもので、今回の演題採択は非常に嬉しかった。学会には、佐倉病院循環器センターの後輩、中神先生と二人で参加した。

今回の私の研究報告は、東日本大震災時における血管弾性の一時的な硬化である。内科学講座 (佐倉) では、前任教授の白井先生のご指導で、cardio ankle vascular index (CAVI) を用いた血管機能の研究が盛んである。東日本大震災の日、私は佐倉病院で当直していたのだが、いつもに比べて脳卒中で搬送される患者が多いのに気付いた。翌日は、通常の外来であったが、CAVIを測定してから診察予定となっていた患者のCAVI値が軒並み亢進していることに気付いた。大災害の後に、心血管疾患が増えることは、阪神淡路大震災や他の災害時の研究報告で有名であるが、震源地から300 kmも離れた佐倉地区でも巨大地震のストレスが血管に負担を与えた事実を捉えることができ、今回はその報告であった。

CAVIは、白井先生のご尽力もあり、欧州では、イギリス、イタリア、スイス、チェコ、ロシアで臨床研究が開始された新しい血管機能検査であり、メイドインジャパン (東邦) の概念である。アジアでは、タイにおいて、心血管疾患の発症にポイントを置いた1万人の前向き調査が開始されており、CAVIは既に国内だけにとどまらない血管機能の新しい概念になりつつある。



学術発表の様子。血管機能を研究しているというブルガリアの美女ソフィアさんと筆者 (右)。



ホームステイ先の庭にて。庭のリンゴでアップルパイを作っていただいた。絶品でした。

学会前日には、ノイシュバンシュタイン城の観光バスツアーに出かけた。この城は、ディズニーランドのシンデレ

ラ城のモデルになった城で、白鳥城ともいわれ美しい。子供のころにみたミュージカル映画『チキチキバンバン』のロケ地であり、お気に入りの映画の舞台に感動した。

学会では、ブルガリアの若い研究者が、私のポスターを熱心にみていた。話しかけると、頸動脈を使用し、動脈の弾性を研究しているとのことであった。

学会会場は、日本循環器学会ともAHAとも雰囲気異なり、一言でいうと“お洒落”な感じなのである。学会会場の中庭でカクテルが飲めることにもびっくりした。

各セッションで、非常に熱心な議論があり、ESCの盛り上がりを感じた。ドイツ滞在の後半は、私の外来の患者さ

んの『ドイツにいる娘の家に泊まれ!』というご指示のもと、ホームステイをさせていただいた。この患者さんの弟さんが、京都大学の消化器外科の元教授であり、娘さんのご主人は、ドイツ人で薬学の化学者であった。夕食時は、英語とドイツ語と日本語が飛び交う状況で、日本の医療のこと、ドイツの医療のこと、“原発”のことなど地元のワインをいただきながら話に花がさいた。

今回、多くの方の親切に恵まれ充実した学会参加ができ、新たなモチベーションもいただいた。学会参加にあたり、佐倉病院循環器センターの医局員、野池教授、現血管機能学講座の白井教授にこの場をお借りして感謝申し上げます。